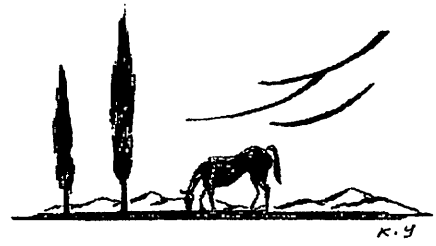
部　報

V

昭和34年度

北海道大学馬術部



目　次

夢に思う …… 主将　大場善明 …… 1
馬の井戸端会議 …… 湯浅正之 …… 8
おくてのねごと …… 稲垣修一 …… 10
北潮と駆足 …… 堀川芳男 …… 11
いとしのベス …… 実吉拳郎 …… 12
馬三題 …… 恩田正臣 …… 14
手　紙 …… 山崎一憲 …… 15
札幌－空港間競走 …… 志水一心 …… 19
馬術部の生活 …… 原　重一 …… 21
落　馬 …… 清水　洋 …… 22
日記より－1959年－ …… 教授I・T・I …… 24
馬　脚 …… 岡田征一 …… 25
会計報告 …… 森　弘栗 …… 27
昭和三十四年度戦績 …… 吉留　享 …… 28
北大馬術部正代部員住所録 …… 小山　毅 …… 35

夢に想う

主将　大場善明

遥か手稲の頂より、眺野を吹き荒ぶ寒風の中に、雄々しく鉛色の空に突きさっらんばかりにそびえ立つポプラの並木にも、何かしら学園特有のわびしさを感じさせて参り玉した。今年も、またつく間に北国の短い夏は過ぎ去って行った。我が北大馬術部のシーズンも、北風の訪れと共に終りを告げ様としている。而し、冬来たりなば春遠からじである。此のシーズンを振り返り、いつも御指導、御援助を頂く顧問・先輩諸兄姉をはじめとする方々に、近況を御報告申し上げると同時に、我々部員一同反省し、北大馬術部のより良き明日への発展を検討してみるのも有意義な事であると思う。此の手記は、単に私、個人の明日への夢である事をお断りしておきます。

私は現在、文学部史学科三年に在籍するかたわら、一部員としての義務を微力乍ら果し、今年七月より、前主将森本悌次兄よりその責を譲り受けた者です。過去に於て多くの名将を生み、不朽の伝統を築き上げて参りました我が北大馬術部の一主将として名を連ねる事は、非常に心苦しい私なのであります。過去二年余の間、部員として庶務・会計・マネeもC・の仕事を幾つかの失敗を繰り返し乍らも、何とか過して参りましたものの、これから先、かくの如き大任を、大過なくやって行けるか否かという不安で一杯なのが、現在、私の偽らざる心境です。

それでは、以下幾つかの項目毎に、現況を御報告申し上げ、更に私の抱負を述べ、皆様の御指導、御批判を仰ぐ次第でございます。

一、部員

十二月一日現在の部員数は、四年目五名、三年目十名、二年目十名、一年十九名、以上四十

四名です。内、女子部員は五名で、我々男子部員に伍して楽しい部員生活を送っております。今春、一時は六十名余の大世帯となり、馬術部始って以来の部員数にはなったものの、途中、幾人かの脱落者を出して現在の部員数になっております。これも正代の主将、特に三一～三二年の樋口元主将の努力が実を結んだものと思っております。此の二、三年特に新入生の入部者が年々増加し、一時は、現部員数よりも、新入部員数の方が多い現象も見られる様になりました。勿論、今春、特に新入生の中より多数の部員を得るべく、北大入学試験合格発表の当日、並びに入学式の日に、乗馬姿も晴れやかに、構内を整然とパレードして、先に二年前より始められた「学内馬術講習会」のP・Rも兼ねて、計画し、実行したのですが、これが案外受けて、前記の様な結果にかなり影響を及ぼしたものと思います。而し、確かに〝乗馬人口の増大〟は我々としても大いに歓迎すべきでありますが、限られた我々の馬匹、施設の中で、無暗矢鱈に部員が増えても、部員全員が楽しく、平等に練習するには、部活動、運営面にかなりの支障を来たし、私自身も此の半年、随分頭を悩めました。早い話が今迄、五頭の馬に五名の部員が練習をしていた所、急に十名の部員が練習に出る事になると、そこには必然と各部員一人々々の〝練習時間の短縮〟という結果にもなり、部員の技術的上達の程度にも、非常に悪影響を及ぼす事となります。事実、昨年から今年にかけて、部員数は二倍位の増加を見ております。我々の自馬、施設が部員増加に比例して改善されなくてはならない筈ですが、此の種の問題は、簡単に解決出来ないのが現状です。従って我は、練習の量よりも、〝質的向上〟に重点をおく事により、その問題を解決して行かなくてはならないと思っております。又、新入部員についても、今後は〝質的向上〟（言葉は悪いですが……）を目指して、本当に我々と共に力を合せて、一生懸命やってもらえる様な方のみ入部して頂き、中途半端な自己の御都合主義で入部される様な方々は遠慮して頂きたいと思います。此の事は〝乗馬人口の増大〟と云う正代主将の方針に反するものであるかもしれませんが、私には此の辺で現段階を飛躍して、更に馬術の技術的向上を計るべき段階に来たのではないかと思われます。勿論、来春も今春同

杯、各種P・Rに依る馬事思想普及の為の行事を計画中でありますが、それを土台にして更に発展させたいと思っております。

一、スタッフ

私が主将に就任しましてから、空前の部員増加に対して、過去のスタッフ陣を更に幅を広げ、出来るだけ多くの部員の方に、部の運営面に協力して頂ける様考慮しまして、以下の様なスタッフ陣を構成しましたので、御紹介申し上げます。

	氏名	（学部・学年）	出身校
主将	大場善明	（文・3）	札幌北高
副将	吉田享	（工・3）	大泉高
マネジャー	千葉裕記	（畜・2）	砂川北高
〃 兼渉外	鶴見好博	（理・2）	静岡高
女子部代表	佐藤典子	（医・1）	札幌藤学園
会計	森弘幸	（工・2）	外谷高
〃	恩田正臣	（教・1）	
庶務（部室係）	玉沢一晴	（獣・2）	札幌南高
〃（〃）	志水一充	（教・1）	
〃（図書係）	小山毅	（教育・2）	新宿高
〃（〃）	山崎一徳	（教・1）	
〃（馬具係）	広岡暢夫	（畜・2）	大手前高
〃（〃）	市村輝宣	（教・1）	〃
〃（厩舎係）	市川端彦	（教・1）	旭川北高
〃（〃）	堀川芳男	（教・1）	
〃（飼育係）	湯浅正之	（畜・3）	前橋高

〃（〃）伊藤公一（医進・2）札幌南高
記録係　四柳智久（繁・2）長田高
〃　原　重一（教・1）
〃（写真係）長藤友建（教・1）麻布高
調教主任　原　邦男（獣・3）兵庫高
技術主任　河原紀夫（理・3）札幌西高

以上のスタッフによりまして、毎月二回、役員会を持ち、部の運営の基本線を検討し合い、更に毎月才一月曜日の定例部員総会によりまして、部員の手による自治的運営をもって、北大馬術部の発展を計っております。従って、現在、部員の半数が夫々の分野に於て責任を持ち、互に横の連絡を保ち乍ら、円滑な活動を目指している訳であります。たゞ、こゝで我々に残念な事には、技術面に於けるコーチも、我々現役部員の中から出さなくてはならず、より高度の技術の習得に非常な困難を感じる訳であります。出来る事なら先輩諸氏の中からでも、再任のコーチをお願い出来ればと思っております。これは、先に述べた技術の〃質的向上〃にも大いに影響する事であり、今後の馬術部の成果にも響いて来るものと思われます。

一、馬匹、施設

すでに御存知の通り、現在、我々の管理しております自馬五頭は、去る二九年、北海道国体の際、先輩氏の御努力によって繋養、管理する事になったもので、いずれもかなりの年令に達し、そろそろ能力にも限界が来ております。従って、こゝ一、二年の間懸案になっております新馬との入替による若返り策を講じなければならない時期となっております。昨年春に、北大附属牧場より入れました新馬一頭の調教も、今夏かなりやってみたものの、私の技術が未熟な為か、思う様に調教も出来ず、今日もなお、競技に使用する事は不可能の様であります。又、つい此の間、十一月十九日に、本年度東京で開かれました国体、全日本大会、全日本学生自馬大会に出場、大障碍飛越に、昨年に引続いて連続才四位に入賞し、かなりの成績を上げて参り

ました〃北標号〃（旧名、ミス・トクシマ号）が、事故に依り北大で亡くなり、まだ将来を有望視されていた名馬だけに、馬術部の責任者として、痛くその責任を感じております。目下の所、日高新冠の北大附属農場と交渉中であります。而し、これからの新馬購入には、余程慎重に馬の選定をしなくてはならないと思います。中央の各大学に於ては、毎年、サラブレッドの新馬を購入し、かなりの成績を上げておる様であります。何もそれにならう必要はありませんが、馬の血筋が問題になって来ると思います。馬の能力、素質等に就いて、私は全くの素人ですので、先輩、顧問の方の意見を是非、お聞きしたいと願っております。それらをもとにして、次期、北大馬術部を負って立つ、名馬を我々の手によって、育て上げて行きたいと思っております。正直な所、我々としましては、更に二～三頭の競技用馬が欲しい所です。又、厩舎、部室等の諸施設にしても、かなり老朽化し、その維持費も、毎年かさむ一方ですが、農場の方からは、これと云ってその費用を出してもらう事も出来ず、殆んど部員の作業による修繕で、何とか場をしのいでおります。而し、これらも近い内には、新築、改築の策を必要とされると思います。練習に使用している障碍も、二九年国体に道庁で準備したものを、札幌競馬場を通して拝借しておるものですが、その大部分は、すでに破損し、我々部員の手で何とか修理し、使用しているものの、一年中、風雨に曝されてはその傷みの度合も激しく、今度、馬術部顧問、半沢道郎教授を通して、障碍格納庫を、来年度新築して頂ける様、目下の所交渉中であります。其の他部室（オ一農場事務所脇）にしても、現部員数にはとても狭く、昨年あたり一時は二階増築の話が出ましたが、資金続かずして、立ち消えとなってしまいました。来年度には出来るだけ解決して行きたい問題と思っております。

一、試合、練習

伝統ある旧七帝大戦をはじめとして、公式戦は、年間十試合以上を数えます。此の内北大で開催されるのは毎年三～四試合程度で、他は殆んど遠征によるものです。本年度の試合の詳細については、副将吉田兄が書いておられると思うので、此の稿では触れず、来年度の遠征に

対する私の抱負を述べさせて頂きます。

五連覇の夢破れて、悲涙にむせぶ〝帝大戦〟は来年、京都大学主催で行われる事になっており、今迄と試合様式を変えて、障碍・馬場の複合馬術により、宮杯杯を争う事になる模様です。来年こそは何としても、覇权の奪還を期しております。又、今年は都合により中止された東京興工大主催東日本大会にも、昨年迄の二連覇の余勢をかって、更に覇权を死守して行きたいところです。例年札幌で開催されておりました〝全道大会〟は来年帯広で初めて開催される模様ですが、これにも出来るだけの選手、自馬を送り、来るべき国体、全日本大会に備え様と思います。先月の北標号の事故により、スケールが一回り小さくなった感が致します。而し乍ら、他の馬は健在ですので、更に努力し、過去の成績に恥しくない実績を上げるべく、闘志を燃やしております。

これからの練習方法については、従来と大差はありませんが、自馬の年令的限界等も考慮に入れ、特に馬場馬術に重点を置いた練習方法を考慮中であります。どの大会に参加しても、試合後のレセプションで、先ず「基本馬術が出来ていない」と講評されるのがいつも定石で、此の様な講評を二度と聞かされぬ様、特に新年度から力を入れて実施してみようと思っております。そうして部員の誰しもが、乙馬場程度はふめる様心がけたいと思っております。少くとも、総合の馬場位は完全に出来る様、指導し、研究し合って行きたいものと思っております。此の練習方法については、技術主任の河原兄に具体的な案をお持ちの事だろうと思います。試合は勝つ為でなく参加する為にあるのがスポーツマン・シップである事は百も承知の上ですが、参加するからには、勝つ事を目的として、日頃精進する事が大切と思います。兎に角、一にファイト・二にもファイト！です。

一、其の他外部との交流・親善

今秋、東京国体に遠征した折、在京の諸先輩の方々が、多忙にも拘らずお集り頂き「在京OB会」なるものを結成され、遠く札幌から遠征しました自馬四頭、選手七名の為に何かと物心

両面からの御援助を頂き、非常に心強く思った次第です。東園会長をはじめ、会員の皆様に改めて厚く御礼申し上げる次第でございます。二・三年前からも、「北大馬術部後援会」なるものの声があり、樋口・田中・生田諸先輩にお骨折り頂いたものの、仲々設立の域を見ずして今日に至っております。現在に於ては単に、此の「部報」のみが先輩と現役との交流のかけ橋として存在しておりますが、もっと先輩と現役との交流が親密になって良いものと思われます。我々としても、来年度には「札幌OB会」がもっと強い形で再発足される事を希望してやみません。

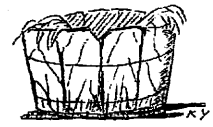
札幌にも最近では、かなりの乗馬熱が盛んとなり、今年は道立札幌医科大学馬術部、読売新聞北海道支社馬術部の結成に、微力乍ら協力して参りました。来年度は更に新しい乗馬団体が生れ、我々の支持力を一段増して行きたいと思っております。昨年末から始めました札幌馬術部との定期戦も、毎年春秋、二回実施する事とし、其の他の新しい乗馬団体との親善も、一段深めて行きたいと思っております。又、単に札幌・北海道内に止まらず、全国的な規模に於ける他の乗馬団体との親善を深める為にも、昨年より我が部が主催しております全日本女子学生馬術大会も、今後、一段発展させて行きたいと思っております。

まとまりのない文章を長々と書いてしまいましたが、より良き北海道大学馬術部の明日への夢からも、此の辺で醒めさせて頂きます。先輩諸兄姉の御意見、御批判をお待ち申し上げております。

霜月、窓辺に白きものの訪れを眺め乍ら記す。

馬の井戸端会議

湯茂正二



才三号、才四号部報の〝生きものの記録〟と題された飼育管理状況をこの欄で読み、私も役柄「我部で繋養している馬はみな高令で云々……、デントコーンは云々……、燕麦は年間三百俵近く必要だが、農場収穫分で賄える燕麦は一〇〇俵位であと云々……、なにしろ予算がないので云々……、裏わら云々……、部員の皆さんの御協力を」を書かねばならないらしいが、これを書くとなると、私如き怠慢児は三号、四号あたりから抜萃して、それに少し色をつけて書いてしまいそうなので、これの内容は今年も昨年、一昨年と大体同様だから、これの内容を知りたい方は前部報を見ていただくことにして、私は此の欄で、飼育係になってから、動物、特に馬に対する見方がどのように変ったかについて、一言。

先日、当番の晩だった。相手も来ないので、一人で夜八時頃、役草をやりに厩舎へ行った時だ。いつものように戸を開けて中へ入ろうとしたが、中から何か話し声が聞えるので、戸の外で耳をすまして聞いていると、それがどうも人間ばなれした声なんだ。「おかしいな、何だろう今頃」と思って増々耳をすまして聞いていると、なんと驚いたことに馬同志が向う三軒両隣と井戸端会議の一時だったのだ。北斗寿は一座の座長気取りだ。馬の世界でも、稀少価値とゆうものは高く評価されるものだと思った。（念のため、北斗は騸馬、あとは雌馬）。その時の話の内容をかいつまんでお話すると、

「我輩は馬である。名前はアップだの、ベスだのって、前か終りの一寸しか呼んでくれない。人間なんて勝手なもんだ。自分でつけときながら長すぎて呼ぶのに面倒なもんでこの始末だ。

もっとひどいやつがいる。北潭をペータンなんて発音なさる。こんなやつはおそらく学校へも行かず、昼間から下宿でマージャンばかりやっている奴だろう。」（北潭談）

「それにしても最近は食糧事情が良くない。この間なんかあまり腹が減ったので、夜中にそっと馬房から抜け出して隣りの飼箱の燕麦を一寸失敬したら、翌朝当番の奴にこっぴどくやられた。その上、下痢してそ

の日一日絶食だったよ。ひどい目に合ったよ」（北嶺談）

「そろそろ国体やら何やらと云って今年は又東京迄も行かねばならぬ。毎年とはいえ、御苦労な事だ。それでも人形が少しは腕が上なら我輩も我慢して頑張ってやるが、二拒止失叔などときた日にや、人様の前で我輩の方が恥かしくて、でも都合の良い事に顔に毛が生えてるので、赤面してもそれほど目立ないが。あまり顔ばかり下げていれば、なお長くなってしまいそうだ。

では今年は六段あたりで少し頑張って奴等を少し吾ばしてやるか」（北嶺談）

「国体で思い出したが昨年の国体にはシェーンなメッチェンが来てたな。確か栗毛だったよ。今年も会えるかな」（思い出すように北斗談）

こっから先も、彼等の井戸端会議が終る迄、私は全部聞いたが、これ以上書くことは真数の関係で許されないので、先を知りたい方は私の口から聞かれたい。

この抔に係となってまず才一の収穫は、馬同士の話が解るようになった事だ。

この分だと会計係などはさしずめ金同士の会話がわかり、備品係はがらくた同士の話がわかる抔になる事だろう。おっとこれは失礼。

映画を見てもその見方に変化が生じる。一例をあげるならば、〝花の大障碍〟のばやてが好成績が得られず、馬主は手放そうとする。そこで寝食を共にして来た馬丁は或る夜こっそりばやてを連れて生れた牧場へ帰る。その間の涙ぐましきまでの努力よ。広々とした自然にあって、人間の商魂なる害敵におびやかされず、あたかも地球創造当時に帰ったかのように……。結局最後に栄冠を射める。（決して映画の宣伝はしていない。）

部の馬にもあの抔な環境を与えてやりたいと何度思った事か。しかしそれは出来ない。

せめて彼等の要求する燕麦位はその量に制限されることなく充分与えてやりたい。燕麦と云えば、あまりにもその量不足に悩まされているせいか、先日デパートの小鳥売場でしばらく小鳥の色彩的美しさ、音色の美しさに魅せられていた時ふと頭に浮んだことは何だ。「このカナリヤは一日、燕麦何升（カナリヤは燕麦は食わぬ事は知っているが）食わしているのだろう」だ。これでは兵ざめだ。「それはお前の頭が……」とおっしゃる方がいらっしゃるだろうが、そんな極端な例が有り得る位、燕麦の問題は我部においては重大である。何も考えずにカナリヤのさえずりを聞きたくなりたいものだ。

軍看（私はこれでも一人前の軍看気取りなので、最後にこの言葉を一回だけ恢わして戴く）に向って「好き勝手な事をよくもあゝずうずうしく、ぬけぬけと書いたものだ」とおっしゃるかもしれない。しかし責めるなら当部報編集係をお責め戴きたい。命令により書いたまでだ。《飼育係　農学部（畜産）三年》

おくてのねごと

三年目　稲垣修一

馬術部で通用する学年は、部に籍をおいている年数である。大体は大学の学年と、部の学年とが一致する。例外として前者が後者をうわまわる事があるが、その逆はない。例外をおくて、超おくてと分類できる。私は誇り高き超おくてである。だが馬術部で通用する学年は大学の学年より優先する事を皆承知してほしい。

馬をかわいがりましょう。乗るのではなく、乗せていただいているんですから。部屋に顔を出すのなら、ついでに馬の顔も見て下さい。声をかけたら、こっちを向くし時には返事もします。

馬術界には特殊語が、少くとも部外者にはそう思われるのが多い。そこで、思わぬまちがいもでてきます。「かんそうもってきてください」といわれても「かんそう」を知らない人は「かんそう」をひっくりかえして「かんそういも」をさがします。「かんそう」は何でもない「ほしたくさ」の事です。「きゆうしや」は「うまごや」で、「おおきくてまえをかえる」は「おおふくてまえをかえる」事でした。

当番――部員の義務で一番つらいものです。馬七頭に水をやって、パドックにつなぐだけで、一時間は楽にかゝります。当番の交代、引きつぎは完全にサボらないでしましょう。

当番の楽しみ―アタック―学生さんだみだ。

すかん牛、才一農場の乳牛。この間、はなれていたおかげで、朝清のボロ出しに時間はかゝるし、うちの乾草はくったし、りんじようを角でついたり。ほんとにすかんバカ牛。

物好きですね。どうして今頃になって入部したんですか。今年の冬、学校から帰る時、原邦男さんが「ぴょう」に乗って雪の上を走っていたのを見て乗りたくなったからです。それにしては、われながらあまり乗っていない。当番の回数では、一年目の中でだんぜん一位だと思うんですが……。

このくだらない文章を読んで頭の変になった人は化学燃料を積み込んで下さい。近眼になった人は許して下さい。ねむくなった人はどうぞおやすみ下さい。

北潭と駆足

堀川芳男

そう、あれは、たしか十月の中頃であった。午後の一時限目が、休講だったので、パドックから北潭を連れ出した。年の島、国体に出場出来ず、悲しみがちな？彼女を慰める意味もあったのだ。台風ですっかり淋しくなったポプラ並木を常歩で放牧場まで行って見た

〈ナニ!!駆足で行ったろうって？　いやほんとに常歩だったよ。だってさ、あゝやせた背じゃ疲れが痛くてとても〉三十分近く馬をうっちゃったまゝ、アオ向けに寝転んで一人物思いにふけっていた。その日は実に良い天気だった。さて、駆け出しがちな彼女を制しながら帰り始めた。競馬場からの道と出会う地点で運悪く〈全く悪かった〉裏場の馬車を引く初男とバッタリ出会ってしまったのだ。ヒヒンと一はねしたと思うともものすごい勢いで走り始めた。いやその速い事速い事帽子はもちろん、両方の長ぐつまですっ飛ばされ、ポプラ並木がどんどん後へすっとんで行く。必死になって「ほらほら」「こらこら」「よおしよおし」「まてまて」「こりゃこりゃ」あらゆる言葉を並べて御気嫌を伺ったのだが、あゝ!!悲しいかな、彼の気持は彼女に通じなかったのだ。後は諦め、必死になってしがみついていた。北潭よ、せめてあの位の馬力〈ほんとの馬力〉を馬場でも出してくれ。

北潭と乗馬

「珍代五種なるもの、真に難しきものなり」部内の競技会の時の事である。面白半分出て見た。フェシングを溜やしインクと解し、ピストルをピースをとるとしたところ、なかなか面白いと思った。始めのマラソン、麻雀はマアマア良かった。さて問題は次のピスト

ルである。その名のごとくいけば、当然ピースになるらしいのだが、実際は「イ。コ。イ。トル」か「シ。ン。セ。イ。トル」であったらしい。呑んだ事のないタバコに火をつけ、インクを滴し、さて馬は？とみたら「サア、大変」北潭しか残っていないではないか!!僕は考えたね、真に考え込んでしまった。でも今更どうしようもなかった。恐る恐る北潭サマにまたがった。まずい時は、仕祢がないものだ。消えたと安心していたタバコ、まだ火がついていたのだ。むせる事、むせる事、我知らず〝グイ〟とカミしめてしまった。「ウア、ニゲエ」、その瞬間「グイ」と拍車が入ったのだ。後はどうしたかって？　決まってるじゃないか、北潭十拍車＝落馬、二三回はしがみついていたが、この定理如何ともしがたく、それ以後、タバコなるもの、絶対に口にしたいと思わないのである。

北斗と北嶺の仲

これは、つい先日の話である。昼の飼付けにはまだ間があった。なにげなく柵にもたれて北斗を見ていた。すると妙な事に気が付いた。柵越しにいる北嶺とすごく仲が悪いらしいのだ。北斗はすごく神経質で、北嶺のちょっとした〝にらみ〟におびえ暴れ始めるのである。あゝ、何と悲しき事か!!男が女にいや雄が雌に怯えるとは。この現象は人間だけじゃないのだなあ、俺はつくづく考えた。

いとしのベス

実吉峯郎

僕の可愛い女は、そのしなやかな指先をやさしく組みながら、僕の話を聞いていました。

―まあ、札幌って素敵なのね、だって此の方がそんなに気に入っておいでになるのですもの。わたくしも行きたくなってしまったわ。

その無邪気で素直な彼女の話し振りと、明るいほゝえみを見て、僕は彼女をからかって見たい欲望にかられたのです。

―それだけ好いところにいて、しかも素敵な恋人が出来たんですからね。

え？

―つまりね、向うで僕の心を捕えた人がいたって事なんです。

―まあ、此の方の？

―まさに僕のですよ。その彼女はね、栗色の髪の毛を

持ち、優しい憂愁をたゝえた大きなとび色の眼をしているんです。

皆は彼女の事をバカだバカだなんて云うし、実のところ少し落着きがなくて、食いしん坊なところがあるけれど、そこがまた可愛らしいんですよ。

―栗色の髪の毛ですって？

―そう、その名もやさしいエリザベス、彼女と言葉が通じさえしたら、もう云う事はないんですけれど、それもならず、僕は彼女の眼をみつめて胸を躍らせているだけです。いつも僕は彼女の体をきれいにして上げる。足も洗って上げる。髪の毛もすいて上げる。食事の支度さえもして上げるんです。そして時々彼女を僕の手に抱き締めたいとさえ思うんですが、彼女は一寸僕に大きすぎる。

と好い気になって次の言葉にかゝろうとして、話相手が僕の可愛い女だとさとって流石に止めました。

―彼女と一緒に寝た事はないけれど、多い時は週三回位、三十分づつ位乗りますよ。

とはまさかドギツすぎて云えないですから。僕の可愛い女は不思議そうに、あるいは眉をひそめながら僕の話を聞いていましたが、僕が余りにこにこ笑いながらしゃべるので、やっと気が付いたのでしょう。僕の手を軽く叩いて云いました。

―まあ非道いわ、此の方ったら！

今年の夏のある昼下り、銀座の喫茶店「L」でのお話しです。

× × ×

そんな話のタネになったエリザベスこと北翠は、数ある部の馬の中で、僕が最も愛着を感じている馬なのです。

僕は五月以来の部活運動でベスに当るのをいつもいつも待ち望んでいました。押えるのに苦労はありますが、その軽快な乗り心地は、僕を陶然とさせるのです。僕が馬術部に入って来たのは、もともと動物が好きで、馬に接しられるから、入ってみようかと考えたためですが、ベスのやさしい瞳に魅きつけられたのも大きな要素と云う事が出来ましょう。

貴族的とも云える嬌慢さから、新入部員を中々近寄せぬ誇り高きミス・トクシマ。オヤエのギッチョンチョンではないけれど、山出しの女中さんのようなリンちゃん。性悪女の典型で、大した才能を持ちながら、じゃじゃ馬振りを発揮し、ひじ鉄砲と強烈なキッスで部員を惑わせるミス・アプデイル、うさんくさげな眼でじっと僕を見るいさゝかロンパリのセクシー、ガール、巨大なヒップを誇るヨシタカ。まずは一番最初にお世話になった温順しいが、狡いところもあるシラカ

八。抜かれたボーイズの北斗、朝清は対照的、前者がその口惜しさを距止や逃ヒと消極的にあらわすのに、後者はいつも逃げ出し反抗する。しかし、朝清氏には障害飛越で、全障害完飛の快感を味合してもらっているので、そう素気なくするわけには行きません。こう見てきてもやはり愛すべき只一頭となるヒベスをおいて他はありません。シャンで元気で溌剌ヒしていて、ヤンキー・ガールの明るさを感じさせるベス。

夏の合宿での障害練習の時の悲しい想い出もあります。僕はベスに乗って張り切っていました。しかし、番が回って来た時僕はやっぱり弱過ぎました。暖の入り方とタイミングはあわなかったのです。

―それまで―次―

と云う制止の声、僕はへたへたと崩れてしまうほどがっかりしたのです。

何に乗るのでも、暖の使い方とタイミングを忘れたら恥をかいて失敗するのだな、と僕は肝に命じました。

× × ×

十月末から十一月始めにかけて、東京で行われた全日本ヒ学生自馬を観戦に行きましたが、その夜僕はいとしのベスに乗って晴れの試合に出場する自分の夢を見たのです。

それが事実となるように、これからも出来るだけ一生懸命やろうと思います。どうか上級生の方々もより一層御指導を賜わり、僕の夢の実現に力を添して下さる事をお願いして愚作の筆をおく事に致します。〈完〉

悪三馬

落馬して
蹴られて
噛まれた話

臣正　田恩

自分も一度北潭に落された経験があるので他人の事は言えないが、こういう落ち方もあるという話

一年目のI君、まだ入部して間もない頃のこと。練習時間になったので、ポプラ並木で草を喰っている馬を連れに行った。林檎の綱をほどいて、裸馬に乗って帰ろうと跳び乗りを試みた。彼女へ？〜まだ草が欲しかったとみえて、急に首をさげて草を喰おうとした。頂度馬の首に手をかけてジャンプしたI君、在るはずの首がなくなってしまったので、そのまゝ反対側に〝ビすん〟。彼女は何をしているのだろうと不思議そうな

顔をしたが、そのまゝ又知らぬ顔で草を喰い続けた。

○

〃馬に接するに、人間がむやみに恐がっては、返っていけないよ〃と注意を受けていたので、恐い〳〵北榆も何ものぞと、手入れをしていた。北榆の左後脚を手入れしている時、彼女、いやがって、少し脚を動かした。俺は恐わくはないぞと、全身で脚を抑えようとしがみついた。力自慢でも馬っ子が相手では、かなうはずがない。格闘の末（？）ついに振りとばされて、おまけに左足をいやというほどけられてしまった。北榆の後脚に抱きついたなんて、今思うと、馬鹿なことをしたものだと、あきれるが、当時は、そんな馬鹿なことも、知らぬが故に出来たのである。知らないということ程強いことはありませんね。ですから観光客は、パドックにつないである馬にかまれて、大事な服もだいなしにするのです。

○

夏休みに帰省した時の出来事である。家に農耕馬がいるが、悪へきがあるので余り人の乗らない馬である。自分は北大の馬術部員である事を過度に意識した為か、英雄意識にかられた馬か、その馬をひき出して乗ってみようと、恐る〳〵馬房に近寄った。近付くと死を向けて、手綱をかけさせないので、投縄でうまく首を捕え、けられてはいけないと、そればかり気にして馬房に入った。馬の後半身の動きを警戒しながら、首にかけた綱を引いたとたん、〃ガブリッ〃腰へかみつきやがった。

〃畜生め！〃一生の不覚を悔んだが仕方がない。結局馬はひき出したものの、かまれた傷がヒリ〳〵して、乗れるものではなかった。これも「注意が足らんため」の一言につきるが　けられ、かまれ、一時は馬が恐くて〳〵弱った。身を以て〃おさ〳〵注意は怠るべからず〃の教訓を身につけた次第である。

手紙

山崎一徳

北海道大学馬術部員Aより、彼の親友、大阪市立大学生Bへ

前略

昨日、落馬して足首をしたゝか捻挫した。歩いて学校へ行けないので、やむなくベッドに寝ている（食堂迄は歩けたから、ご御安心）。今、寝返りをうっ

た時、足首に激痛を覚えた。「痛い！」と思った途端、貴様の事を思い出した。思い出して手紙を書く気になった。

故郷を離れて、こちらへ来てから数ケ月になる。こちらの生活は全く素晴らしい。大阪の下町のゴミ〳〵した所に、今も巣くっている貴様が実に気の毒だ。

北大での生活の一端を示そうと思って、写真を一枚同封した。俺が愛馬とほおずりして立っている写真だ。まあ、俺の愛馬を見てやってくれ。まっすぐに通った鼻すじ、フサ〳〵とした金髪、人の云う事には実に忠実で、おとなしくて、しとやかで、うっかり厩舎に近づくと、完全にグロッキーになる程、激しく蹴られるが、――それ程貴様観念が発達していて、全く貴様に乗せてやれないのが残念だ。

馬術部の新入部員歓迎会の席上、新入部員が順に入部の動機を語っていった。そのうち一人が、やおら立ち上って曰く、「馬に乗ってたらイカスと思いまして……」――爆笑と拍手――彼の、自分の気持をスパッと云い切った態度は、実に見事だった。俺の心の中にも確かに彼の云う様な一面があると思う。しかし俺には、彼の様に平直に云い表わす事はできない。やむなく俺は、俺の気持を歌にたくした。

馬で行くポプラの並木、幹のかげに、

娘が見ている、馬上の僕を

この歌と他に二、三の歌を大阪の歌会に出したが、散々の成績だった。とにかく、あらゆる非難が俺の歌に集ったらしい。全く天才は世に認められ難しゃだナ。話が短歌の事になったが、君は大学に入って、何かサークルに入ったか？短歌はどうしてるんだ。君の主張する口語自由律短歌と、俺の口語短歌とは随分性格が違うが……、まあ、論議は今日はよそう。やゝこしい事を書くと眠たくなってくるし、貴様も眠いだろうから。

北大での全学連は、今、安保反対で奔走している。貴様は高校時代、よく云っていたナ、「俺は共産思想は嫌いだ。あたら、ソ連のカイライと化した全学連を憎む。日本男児は米国を敵に回すと共に、ソ連をも敵に回す勇気が必要だ」と。しかし、現在俺達の敵は、ソ連にしろ、米国にしろ、どちらの国にも潜んでいる戦争勢力じゃあないだろうか。貴様の云う様な、一昔前の愛国的好戦論には、賛成しかねる。俺は共産主義や、全学連の是非を論ずる前に、先ず求める才一のものは、平和でなければならぬと思う。そう云う意味で、冷戦を激化させる安保に反対し、俺はデモに出るつもりだ。

何だか、だら〳〵と書いた様だが、寝て書いていた

ら、たまらなく眠くなった。失敬して眠る事にする。今度は足が痛くならない様に、ゆっくり寝返って、と……、じゃあ、おやすみ。

×月×日

B兄　　Aより

その返事、BよりAへ、

貴様の無礼千万なる手紙、受取った。本来ならば返礼を忘れる所だが、現今、ヤクザさえ御礼まいりをする時代故、親しき仲にも礼儀あり――一応の礼はこゝにする。北海道の土地、気に入り召された由、まことオレも嬉しい。四年間、いや永遠にその気でいてほしい。（どうも貴様は、あきっぽいからいかぬ）。

北大の机は昼寝に都合が良いか、どうだ。眠りすぎて寮に帰ることを忘れるなヨ。オレの方も勉強せずに、気持よく遊んでいる。市大伝統の自由な学風は、オレをしてやたらに遊ぶ事を強制するものだから……。貴様に新たなる恋人の出来た事を祝福する。馬たあ、ほんに良い所へ目をつけたもんだ。温順しくて、スマートで、その上Aとか云う男より、も一っ立派な面を持っている。――かの馬のツラと、貴様のツラと、ヌーッとつき出たそのツラの様、ツンラ、ツンラ、はったと見れば、さながらツラ厚きツラの展覧会とこそ見うけらる――。

サークルの方は、経済研究会と「しきなみ」短歌会に入った。能楽研究会に入って、謡曲と仕舞を習おうかと、おやじにもらした所、馬鹿な真似はやめろ、と一カツ食わされた。先日、四ケ月ぶりに歌会に出席した。オレの作品を、まあ見てくれ給え。

夜汽車ばく進、影に立つ赤い女

兵六の恋、まだほのかな青色の恋

この「赤い女」と「青い恋」について、一論議かわされた。無邪気な運中は、この「赤」と「青」は、夜汽車の信号と恋の赤信号、青信号を掛けたものだと、もったいぶって云う。頭のよく切れる運中は、いわゆる「赤い女」――「夜の女」を連想する。いや全く恐れ入った。こゝに於て貴様の意見とオレの意見は一致を見る――天才、世に認められがたし――。オレの作った意味はそんなものじゃない。兵六とはオレの様な、そうだ貴様のような兵六王の男。赤い女とは情の女――しかし、彼女の熱は兵六にはない。いわゆる恋を恋する女の事だ。青い恋は兵六の赤い女への初恋を意味している。ざっとこんなもんだ。いや、面僕ない。

次に学生運動の事だが、オレが一昔前の反国的好戦論者だと？　馬鹿を云え！　日本男児の敵はソ連

米国の国民だと誰が云った？貴様もし大阪に居れば、速刻ひざ談判だが、北海道は夢の国、俺の鉄拳を飛ばすには遠すぎる。こゝで誤解のない様、もう一度オレの考えを云ってやる。貴様、戦争努力を憎めと云うが、我々はそれを憎む前に、戦争努力は何故おこり、増大するかを考えねばならぬ。それに対する共産主義側の解答は、増大する資本力と貿易圏獲得、あるいは、軍需景気の必要性から帝国主義的侵略に対する共産圏の防禦と云う事が云われる。しかし、ボタン戦争の可能な時代に於て、資本主義国が真実、戦争を求めているかは疑問だ。現在は戦争で得る利益よりも、戦争に支払わねばならぬ犠牲の方が、ずっと多い時代だ。一方資本主義圏側の解答は、マルクスの笠をかぶった共産圏の帝国主義的陰謀に対する資本主義圏の防禦だと云う。しかし、これも共産圏側の解答と五十歩、百歩、これではラチがあかぬ。俺はこう思っている。戦力増大の主たる原因は二つのイデオロギーの持つ保守体制動揺の危機に対する防禦戦だ。資本主義国に於ては資本主義が保守的イデオロギーであり、共産主義国に於ては、共産主義が保守的イデオロギーなのだ。この二つ、それぞれの為政者の側から見れば、どちらであろうと、保守と云う事に於て大した意味の違いは無い。

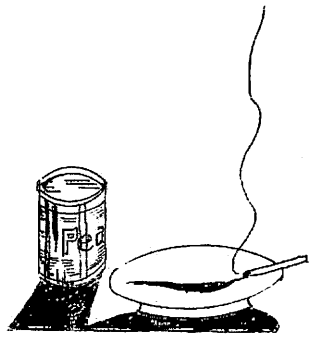
資本主義も共産主義も全く仮説の域を出ぬのだから、どちらが正しいか？――そんな事がおいそれと分るはずがない。レーニンからスターリン、三転してフルシチョフの思想へと変った共産主義に貴様は信頼をおけるか？　スミスからケインズの移動が、マルクスなる人により、いとも簡単に行われたと云う事実からしても、資本主義へも絶大の信頼を我々はおけまい。そしてこゝに対立する二つの仮説の関係は、どちらが正と云う事もなく、唯相反するものとして併存しているのだ。両為政者はそれを見ぬいている。正悪の信念で他を批判し、自己を宣伝しているのではなく、彼等はたゞ革命を恐れている。革命思想への人民の感化を恐れている。相手国が自由にいかなる影響をも及ぼさぬと云う事が保證されゝば心配はない。しかし日々為政者は、敵国のP・Rにうかされ様とする革命分子の行動に脅威を感じているのである。だからつい、遅ったイデオロギーを持つ国の息の根を止めたくなるのであるし、又、戦力に於いても、相手国の有位に立つ事は、人民の心を引きつけるに大きい力を持つものなのだ。俺は米ソの国民を憎むのではなくて、保守的努力に甘んじなければならぬイデオロギーが癪なのだ。真の共産主義が可能かどうかは、浅学のオレには全く分らぬ

が、現在の俺には解らぬが故に、ソ連体制が不安なのだ。俺には愛の認識に始まる絶対の自由と平等が懐しい。しかし元来は相対的なものに見える愛が――その愛が絶対的なものになり得るか？　そんな事が果してあろうか？　イヤハヤ、俺には解らぬ。オレには解らぬ――解らぬ話はもうよそう。貴様に解るなら教えてくれ。

今日は随分書いたナ。すっかり腹が減って、書く元気がなくなったから、これ位でペンを置く。お返事をそう。

×月○日　　サラバ

A兄　　Bより



札幌・空沼岳縦走

志水一允

種々の木々が多彩な色合を呈する程に、晴れた秋空の下、美しく近隣の山並が映ゆる中、札幌岳に登るべく、定山渓に降り立ったのは、十一時頃だったと思う。折しも風に舞う落葉に、秋も深まっていた。落葉の降り敷く山道を、冷たい山気に誘われて、山の君りの身に浸むのも心地良く登る中、いつに変らぬ谷間の景色が、誰にでも感じられる様に、山の感じを強く与えてくれる。冷水小屋まで、一気にかけ登ってみると、そこには誰もいなかったが、ストーブには残火があって、湯がわいていた。室の中も暖い。途中で会った二人連れが憩って行ったのであろう。自分も遂く東京に居る恋人に思いをはせる程に、一人、山小屋で冷たく冷えたにぎりめしを頬ばるにつけても、さっきの二人連れが羨しかった。持参したウイスキーをグラスになみ〳〵とついで、ゆるやかに傾ける程に、その芳醇な

る酒は、体内をめぐって炎と燃える時、紫煙を口から吸って鼻から出しつゝもて遊びつゝ、山小屋の雰囲気に浸って、快い夢想にふけった。この軽い夢から覚めると、一つ余したにぎりめしをリュックにしまって外に出た。風が冷く身に浸む。そこから頂上までの二キロメートルはかなりの急傾斜であった。呼吸が乱れてハタと前方を仰ぎ見れば、広大な空が拡がっていた。山並の襞襞がクッキリと浮び上って、曇りのない秋の陽ざしが四囲の静寂を破っている様な感じだ。小鳥の声さえもう聞えない。旋律ある静寂さがあるだけだ。下宿生活の無聊を感じはじめていた自分を、この茫々とした眼前の眺望が四畳半の生活から、もっともっと大きい自由な世界へと引きづっていく様であった。この眺望に身を任せつゝ煙草を吸う。風に誘われる片雲が、故郷への郷愁を誘う。今しも羊てい山の裏側に太陽はかゝって、神のおられる様なこの情景を辞さなければならなかった。滝の沢へ降りるべく登って来た道の反対側へと辿っていった。しばらくの間は自分の辿る道が間違っているとは思ってもみなかったが、自分の辿っている道が、唯いたずらに山の尾根に続いているのに気がついて、疑問を持ちはじめた。地図は持っていなかったし、道標だけが頼りであったが、それさえ更あたらず、さっきの二人連れの他、誰にも会わず、他の道を探すにも遅かった。引き返す時間はなかったのだ。自分の前に細々と続く道を進むより他なかった。この道が滝の沢に降りるのでなかったら、空沼岳に続いているはずだった。黄昏近い山気は、いよ〳〵冷えて、足の下には三百米程の電柱が立ち、運動靴の底から身体が冷えはじめてくるし、不安はいよ〳〵つのっていった。羊てい山が遠く夕焼の西の空に見える様になった。自分は北東に進んでいると見当をつけた。が、今となっては、方角は何の役にも立たなかった。この道が滝の沢へ続く道であることを祈ったのだが、それがすっかり絶ち切られたのは、札幌岳から二時間余も歩いた時だった。〝空沼岳二百米〟、あゝ何んという無残な道標であったことだろう。あせり切った思いで、空沼岳の頂上に着いて見ると、太陽はすでに没し、夕焼の西の空も暗赤紫色に変わり、寒風が虚空にヒョウ〳〵と響いて、近隣の山々は茫黒く沈み、その寂寞とした様相を見て、恐怖におのゝいた。そこにはもう旋律もなく、たゞ怪しげな緊張があった。自分がこゝでもがけば、その緊張が破れて、自分に恐ろしい災難がふりかかってくる様だった。とにもかくにも、頂上から下らねばならなかった。困ったことには岩が露出していて、その周囲には笹やはい松が繁息しているのみで道らしい道がない。無我夢中で探したが

見つからない。空沼から下に降りる道がないとしたら、札幌缶に帰るより他に仕方がない。止むなく、今来た道をもどると、星の出始めた空の下、降りるべき道を見出した。やがて、星が降る様になるとともに、道もすっかりわからなくなり、マッチをすりつゝ、道を判断して行った。それに、空沼に熊が居るということは、前にも人から聞いた事があったので、ちょっとしたざわめきまでもが、やたらと自分の胸を萎縮させた。自分の身体は張りつめていた。幾度も道を踏み外してすべり落ち、その度に、足の筋肉が痙攣し、自然自然に落ち入っていった。間もなくして、沼がうす白く反射して、それが何物だかその正体がつかめなかったが、やっと沼である事がわかった。頂上から一時間も歩いた頃に二番の沼に出会した。が、その時、樹々の間にちらっと光るものが見えた。一瞬我が眼を疑ったが、それはまぎれもなく、窓よりもれる灯だった。思わずかけ出した。歓昂したストーブに手をかざした時の暖かさ、人々の談笑の声を聞いた時の安堵感、お茶漬けと缶詰との旨さ、感慨無量であった。煙草が旨い。夜はシュラーフを貸してくれる人も居て、暖かな山小屋の一夜を過すことができた。

馬術部の生活

原　重一

肌寒く未だ冬の名残りきびしかった四月に、馬術部生活に入って以来八ケ月、十一月の声を聞いた今日この頃、雪が散らつき始め、いよ／＼冬だ。朝に夕に部ぎみた手稲山、藻岩の緑も白い帽子をかぶり始めた。雪には縁遠かった我々には　来るべき寒―一面の銀世界―は大きな魅力でもある。御馬達にも又寒い毎日が続くのだろう。銀世界での乗馬、想像しただけでも心がおどる。技術の方はいっこうに進歩がないが、それはそれなりに、又楽しいものだ。いろ／＼なことがあったっけ……。目をこすりながら五時半頃出かけての朝の練習、作業、合宿、そして当番も大分慣れてきた。……その数多い古い頁をめくって見ると……

合宿も終り、いよ／＼二学期も始った九月のある日旺日だった。我等が馬術部での当番は恐らく千秋楽で

あろう田中さんとの当番。午後のことだった。どこからともなく手に入れたとうきび……この呼び名も我々にはめづらしかった……をストーブで焼いたり、ゆでたり、舌づつみをうったあと。雨上りの空はあくまで青く気分がいい。田中さんは愛馬北嶺に、堀川君が北斗に、そして小生は北嶺にまたがった。先に出ていた北嶺がさもうまそうに草を喰っていた。ポプラ並木を……ポプラ並木を馬の背にねてみるのも又味がある……抜けて牧草地へ。牧草地は二番牧草も刈り取られ、馬逸には格好の地だ。体を伸び〳〵とさせて草を喰う馬、その背にねて仰ぎみる空、きれいに澄み切った青空、西の方を見れば折から真赤な夕焼、遥なる山波、羅岩の頂には雲がかゝっている。ポプラ並木を通してみる農学部が夕陽に映えて実に印象的だ。

都会では吸えない空気、牧歌的風景、これを満喫しないで何しに北海道まで……と思わずにはいられない。「北大に来て馬術部に入らなくてどうするのかなあ」とは田中さんの言。同感なり。……といったこんな頁があった。

あの時の北嶺も今では、見事国体で優勝し、何か近寄り難い程貫録が出てきたようだ。貫録負けしないように、さあ又馬に乗ろう。

落馬

清水　洋

小生は一年目部員の中でも、まず馬から落ちた経験は多い方だろうと思っている。

そこで、その中から二三拾ってみようと思う。まず第一回目は、これは今でもはっきり覚えているが、講習会も終りに近づいた頃のある日、小生、例によって吉田さんの〝清水くうん北翠〟という声に勇んでゴム長で北翠に乗ったものだ。ところがどう間違ったか、その日は駈歩の号令がかかった。小生少々不安だったが、よしやってやれ、と思って足で馬の腹をけってみたのだが、一向に駈歩に移らない。そこで又例によって、吉田さんがボッコを持ってこっちへ走って来るなり、〝こんちきしょう〟へもっとも畜生には違いないが〉と叫びながら、鞭のしりを思切りひっぱたいたものだ。この突然の攻撃に、馬はびっくり、猛然と駈歩

で走り出した。ところが一度止めようとすると止まらない。こっちは馬にしがみついて、もう落ちるか、もう落ちるかと顔色なし。この杯子をレールの上にどっかりこんと据り込んで、終始御見物の悪童共は、実に楽しそうにゲラ〳〵笑っている。とう〳〵馬場二周目に記念すべき初落馬、おまけに口から先に落ちたのでいやという程泥を喰った。馬術部始って以来、馬場の泥を喰ったのはあまりいないんじゃないかと思っているのだが。

次にこれ又よく印象に残っているのだが。

夏の合宿の時の事で、小生と大場さんと市川との三人が次当であった。昼の作業後、柘伯さんが才二勇君を引っ張り出して、ハダカで〈人間がではない〉ポプラ並木をとばしていた。しばらくして小生に代ってくれたので、これ幸とばかりに並木を快調にとばしていたが、途中何を思ったか、突然九〇度左のアゼ道へガクンと曲ってしまったではないか。

その時遠くから見ていた市川君の話によると、〝清水のやつ快調やな〟と思っていると、急に左へ曲ったので、どこへ行くつもりだろうと思ってフト馬上を見ると誰も乗っていない、まるで鳳につまゝれた杯だったそうだ。それもそのはず、その時小生道端の溝に頭から落ち込んで、一生懸命そこから抜け出ようともがいていたのである。まったく阿呆らしいやら、情ないやら。その後の話が又傑作なので。泥んこになってやっとの思いで溝から抜け出てみると、勇君はアゼ道を向うへ走って行く。丁度その時、そのアゼ道で弁当を開いていた二人の娘さんがいたが、かの勇君魅せられたかの如く彼女達の方へ突進。驚いたのは彼女達、一人はよく一方へ避けたが、他の一人は必死になって勇君の前をどん〳〵逃げて行く。いくら速くても馬には叶わない。その距離二三メートルになった時、彼女もうたまらんとばかりに田ンボの中へぬちゅ〳〵とはいり込んだ。勇君は雄々と走り去った。彼女田ンボの中で青くなって佇立ち、ナイロンの靴下も台無し。それを見ていておかしいやら、気の毒なやら、後で大場さんとあやまることしきり。それにしても小生その後二三日、腰や首が痛くて弱った。

憚にはよく跳られて落されたものだ。しかし落されれば落される程憚が好きになり、又フアイトもわいてくる。それは丁度恋人に冷くされゝばされる程その人が好きになる人があるようなものである。もっとも小生等はリーベに落されたことは無いが。

要するに体験によると落馬症を積むことは馬術上達上決して無駄ではないということである。

日記より—一九五九年—

教養 一・T・I

霜の降る明け方
ひとしきり胸は痛んで
朽葉かすかに色づく

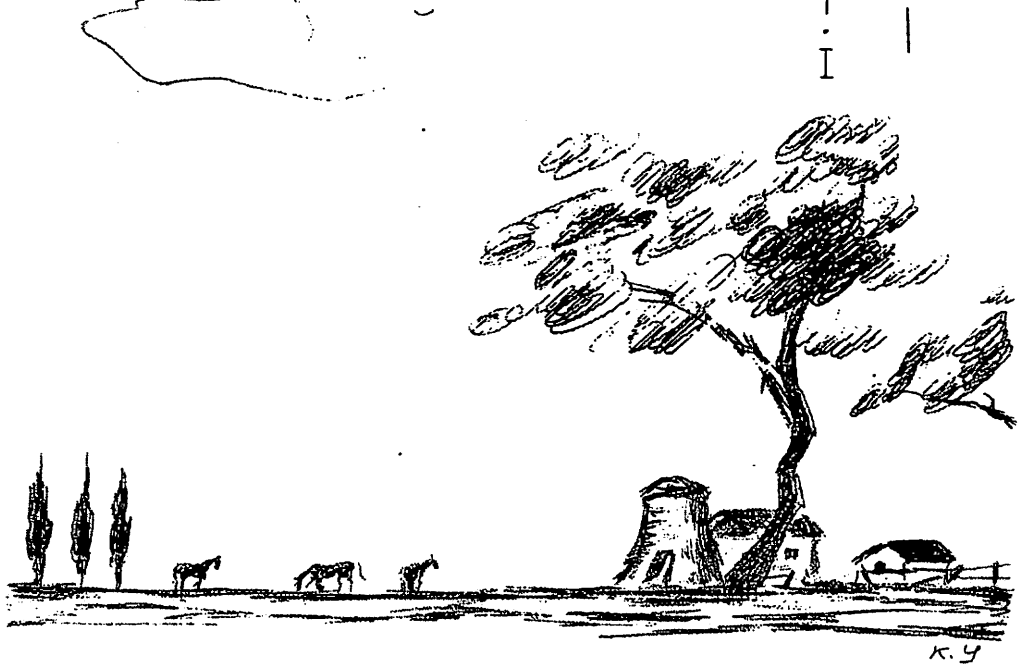
暖かな陽の光
愛を追うその子の夢
輝やかに魂は溢れる

（十月二十八日）

秋空に黒々と楡の大枝
ころころと落葉して
降りそゝぐ光と木の葉

靴音は快く甍を敲く
ひとの子は誇らかに
命の寂しさを想う

（十一月四日）

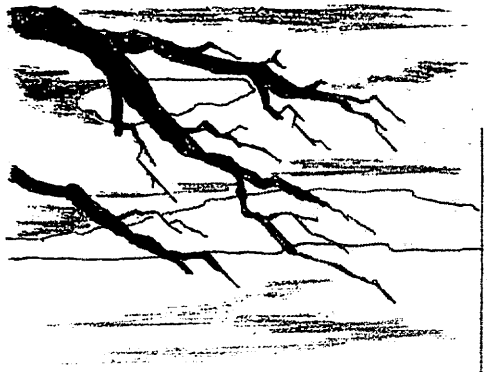


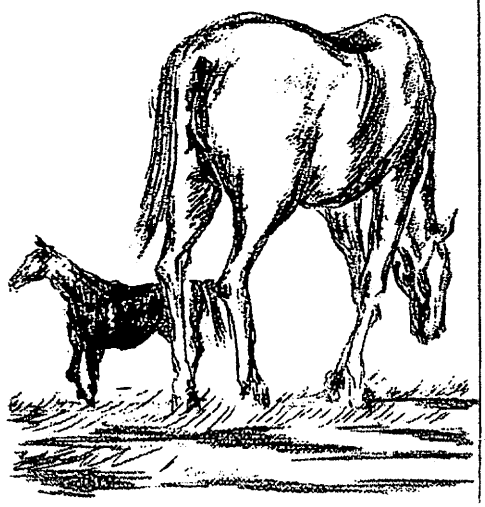
馬脚

岡田征一

元来、万物の霊長である人族は、我儘である。我々一般、つまり動物神士は人間の如く、頭はよくないし、道具を使うことも出来ない。断っておくんであるが、人族は我々馬族が言語を持っていないと思っているらしいのであるが、とんでもない馬っプンである。我々は言語を持っているんである。あえてこゝでその用法と発言を教えないのにはわけがある。それは我々の言語を人間が解読したのでは、人族がかわいそうで、日頃身に覚えがあるだろうが、どなり散らしたり、拳をふり上げたりなど出来ないはずである。どうしてだか、それは想像にまかせるとして、かように人間は哀れで、自分が我々に観察されているなど想像も出来ない、いやむしろその逆だとさえ考えている程のおろか者である。だが、人間は悪賢い。それで我々が人間に立ち向うのは不可能なのである。そこを人間は見すかしている。ッ然来が悪い。吾輩の背中に彼等は鞍という重りを載せ　その上吾輩にとっては張合に当る拍なし、彼等が言うところの馬銜をくわえさせられる、なさけないことだ。人間は、我々馬族を見ると、鞍と馬銜なしでは一人前でない拍に思うらしく、馬銜が口の中に入らない拍に、アゴに力でもへれようものなら　それこそ大変だ。これはほんの一例にすぎないのである。云い遅れたが、吾輩には、れっきとした名前がある。「北斗」これが彼等が吾輩につけてくれた呼び名である。吾輩は姿には自信がある。友達の「北嶺」君も姿は悪くない。彼女は気性が激しく、我々馬族の唯一の武器「かむ」「ける」によって宿敵たる人間を恐れさせている。いゝきみである。彼女は頭もよい。話が大変横にそれたが、吾輩はすらりとした肢と均整のとれた体格をもって、オンリー、ミスターホクダイを自負しているのである。いつだったか忘れたが、我々の重要な食を与えに　いつもなら二人で来るのが、一人で来たことがある。その人間は確か、彼等は〝オーヤッさんと呼んでいる人間である。吾輩にはそう聞える。吾輩は二年間程彼にしぼられたと記憶しているが、はっきりは知らない。なにしろ彼等と違って。コッペッへ彼等がよく頭をさしてこう云うので、きっと脳みそのことだろう）が弱いのである。彼等はまだ〳〵変

てこなことをいう。北海君や北標君などを〝メッチエン〟と呼ぶのもその一つで、吾輩にはその意味が解らないのである。またまた横道にそれたが、物にはついでということがあるからまあ、許してもらうとして、彼（オーヤ）氏は黙々として一人で仕事をすませてしまったのである。翌朝も彼一人で、遂に彼の相棒は現れなかった。不埒なやつだその相棒は！いや、不埒ではすまされないぞ、吾輩は、そいつをけとばしてやらにあ、腹の虫がおさまらねえ気がした。今思い出したが、その男は確か自分を色男だと自ら認める様なことしか云わない〝ウマシカ〟な人間である。〝オーヤ〟さんはあえて何も云わず、その色男の良識と責任感にその解決策を求めたのである。実に吾輩はその態度と思慮の深さに感心したのである。〝ウマシカ〟な色男に代って感謝致すのである。ところで、あらぬ所から横へ／＼とそれてしまったが、結局人間は我々馬族が可愛いいに違いないのであろう。可愛いからこそ世話もしてくれるのだ。それなのにである。我々馬族か彼等の云うことを聞かないというのは、彼等をして彼の恋人に対する態度と大して変らない状態におちいらせるに違いないのである。彼等が怒るのはあたりまえである。だがしかし、怒った後すぐ彼等は我々を以前より一層可愛いがる。吾輩にもこの意味は解らないのである。





会計報告

北海道大学馬術部

（昭和33年9月～昭和34年9月）

摘要	収入
一般会計	182778
特別会計	71635
総収入	254413

摘要	支出
一般会計	121551
特別会計	107193
総支出	228744

総残高　25669

〔一般会計収支内訳〕

摘要	収入
部費	76150
入部金	9300
体育会費	7250
その他	10462
前年度繰越金	79616
計	182778

摘要	支出
飼育	29532
備品	22718
庶務	31628
通信	6852
親睦慰労	11922
加盟	13000
医療	5899
計	121551

差引残高　61227

〔特別会計収支内訳〕

摘要	収入
宣伝パレード費	26000
女子戦広告代	8500
学内講習会費	9000
体育会	11250
学生馬術連盟より	7095
パーティ純益	5674
慰支代	4116
計	71635

摘要	支出
試合遠征	66230
庶務	9950
親睦慰労	21313
特別謝礼	5700
講習会派遣費	4000
計	107193

差引残高　－35558

1959・10・5　　工学部二年目　森　弘　幸

昭和三十四年度戦績

土口田　吉子

○五月二十四日

対北大乗馬同好会春季定期戦（於　北大）

同好会（－315.25）――北大（－895.75）

出場選手

同好会　半沢（道）、青藤、正畜、乾、生田、小野、佐合、滝沢、田中（兄、弟）、松尾

北　大　森本、田中、佐伯、本橋、大場、原、河原、湯浅、千葉、鶴見、小山

同好会には勝てないというのが通例になっているが、今回も例外ではなかった。同好会といえども、実質的には馬術部O、Bがかなり委る為、我々の弱点を逆につかまれているようで、やり難い相手である。大量十一名戦とはいうものゝ、前記のような減点数で、全く恥しい次第だ。シーズン前のウオーミングアップだとしても心細い。

○五月三十一日

北海道学生馬術選手权（於北大）

対帯広畜産大学春季定期戦（〃）

対札幌鉄道管理局春季定期戦（〃）

対帯広大戦（シニアー）（兼道学生選手权）

北大（－116.75）――帯畜大（－126.75）

学生選手权個人賞

①山場（帯畜大）②本橋（北大）③佐伯（北大）

同　右（ジュニアー）

北大（－120.75）――帯畜大（－551.00）

対札鉄戦

北大（－148.00）――札　鉄（－319.25）

出場選手　森本、田中、佐伯、本橋、大場、河原、原、湯浅、千葉、鶴見

北海道学生馬術選手权（通称イン・カレ）は、道内での馬術部を有する大学が、帯畜大と北大のみのため、毎年春の定期戦と兼ねて行っている。こゝで、定期戦のシニアー、ジュニアーについて述べると、シニアーは春にはレギュラーを、秋には四年目を除いたレギュラーを当て、ジュニアーは春には三年目以下、秋には二年目以下からチームを構成している。札鉄との定期戦は、昨年から始められたものであるが、他大学と

の試合と同じく、このような地元の社会人チームと親善試合を持つことも、ある意味では有意義なことであろう。

○六月二十、二十一日

第八回東北北海道地区学生馬術大会（於北大）

第四回対東北大学定期戦（於北大）

東北北海道大会

①北大　②帯畜大　③東北大　④岩手大、以下、福島大、岩手医大

予選トーナメント

東北大（－921.00）――岩医大（－1008.00）

岩手大（－785.00）――福島大（－861.25）

北　大（－333.25）――帯畜大（－367.50）

敗者復活戦

帯畜大（－498.50）――福島大（－628.00）――岩医大（－798.00）

決勝リーグ

帯畜大（－445.25）――東北大（－469.75）

北　大（－350.25）――岩手大（－569.75）

北　大（－427.00）――東北大（－808.00）

帯畜大（－405.50）――岩手大（－551.75）

東北大（－639.00）――岩手大（－782.00）

北　大（－454.75）――帯畜大（－639.00）

北大（三勝零敗）、帯畜大（二勝一敗）、東北大（一勝二敗）、岩手大（三敗）

対東北大戦

東北大（－1103.00）――北　大（－1118.00）

同　右女子オープン戦

北　大（－230.00）――東北大（－255.50）

出場選手　森本、佐伯、本橋、田中、大場、原、湯浅、吾田、千葉、片山、佐藤、高階

東北北海道地区学生馬術は、本来なら今年は福島大にて行う予定のところ、先方の都合にて北大で主催した。参加校が六校の為、予選トーナメントを行い、その勝者と、敗者復活戦の勝者との計四校にて決勝リーグを行った。結果は前記の如くであるが、北大は自馬の強みも加って、全戦全勝にて優勝し、同時に、今年も昨年に引続き、全日本学生馬術王座決定戦の地区代表校として選ばれた。しかし、本大会で勝ったとはいえ、昨年同様、帯畜大が常に北大の後を追って来ている。帯畜大は、北大と同様、かなり自馬に恵まれているが、それらの点を考えると、今後、我々がマークすべき相手として、帯畜大が強く浮び上って来るであろう。続いて行われた東北大との定期戦も、その余勢

で当然勝てる試合と思ったが、八名中、四喰い・三同点、一喰われで敢無く負けてしまった。全くツイてなかった。同時に、女子のオープン戦をしたが、女子チーム伝統の強みを(?)をみせて快勝した。

○六月二十七・二十八日

第六回北海道馬術大会(於北大、大通り特設馬場)
第十四回国体馬術北海道予選(〃 〃 〃)

自馬複合馬術(左他騎乗を除く)(於北大)

①鎌田(札乗ク) 洋考号
②中曽根(帝畜大) リガレット号
③大場(北大) 北鋼号

自馬六段飛越(以下、於大通り特設馬場)

①荒川(帝畜大) アヤメ号
②佐伯(北大)・北操号
③丸山(帝畜大) 岸花号

自馬中障碍飛越

①松本(札乗ク) 洋考号
②鎌本(帝畜大) リガレット号
③佐伯(北大) 北操号

貸与馬中障碍飛越

①山場(帝畜大)
ェ干葉(北大)
3渡辺(会社員)

婦人少年障碍飛越

①小佐部(光星高)
②佐藤(北大)
③片山(北大)

この外、老年障碍飛越では、平沢・高杉両先輩が二、三位を、又、琴平競技では太桑部長が活躍した。今年は、PRを兼ねて、道大会を派手にやろうということで、第一日目は自馬複合を北大馬場にて、第二日目はその他の種目を大通り西八丁目にて華々しく行うことになった。観客もかなりの数で、その点では成功したといえよう。国体予選を兼ねるので、当部の馬をより多く入賞させんと、四、三年目の大部分が出場して大いに気焔を上げたのであるが、結果は芳しくなかった。しかし、札幌で大会を開く場合、直後部員特に高学年に種々の負担が重なり、その準備等のため、必ずしもベストコンディションで試合に臨むことが出来ないのが普通であるが、今回もこのことが多分にいえるだろう。今后十分検討すべき問題だと思う。だが、何といっても、実質的練習量の不足が、失敗の原因だ。

○七月二十四、二十五、二十六日

第十七回国立七大学馬術定期戦（於名古屋）

①名大（三勝一敗）②京大（二勝二敗）③北大（二勝二敗）④東大（二勝二敗）⑤東北大（一勝二敗）

名　大（－178.00）―東北大（－127.00）
北　大（－105.00）―東　大（－134.00）
東北大（－62.00）―京　大（－103.00）
名　大（－98.00）―北　大（－123.00）
京　大（－110.00）―東　大（－115.00）
北　大（－36.75）―東北大（－94.00）
名　大（－102.00）―京　大（－137.00）
東　大（－55.00）―東北大（－103.50）
東　大（－37.00）―名　大（－42.00）
京　大（－49.00）―北　大（－56.00）

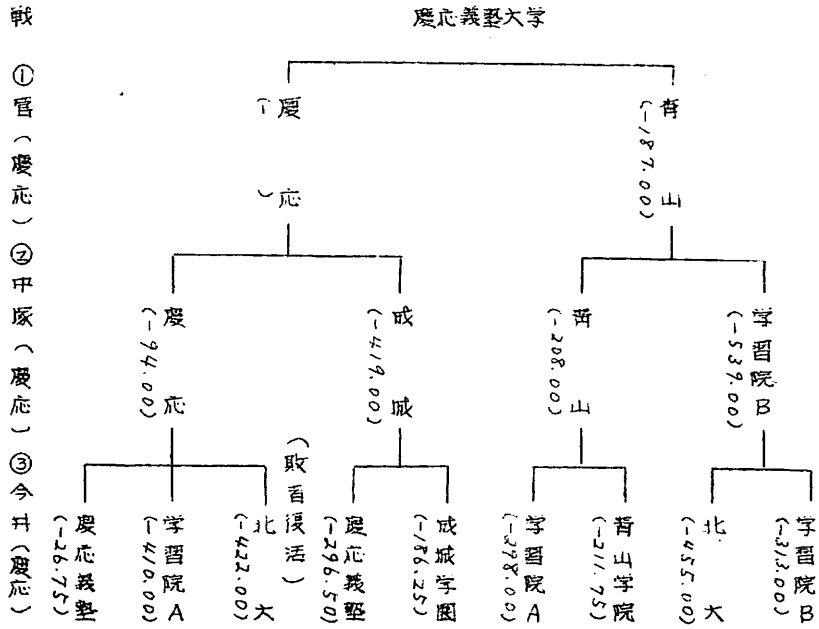
出場選手　桑本、田中、佐伯、本橋、大場

五連勝の夢も破れた訳だが、何といっても、暑さが災いしたようだ。障碍程度も割合低く、実力も接近しているので、あと一歩という感がするが、それだけに長い旅行及びその時のコンディションが影響するのであろう。しかし、この大会だけは勝ちたいものである。

○八月八、九日

第二回招待全日本女子学生馬術大会（於北大）

①慶応義塾大　②青山学院大　③成城学園大、学習院大B



個人戦　①晋（慶応）②中塚（慶応）③今井（慶応）

出場選手　片山、佐藤、田中

本大会は、女子馬術興隆を計って、昨年より当部が主催して行っているものであるが、その後女子部員の不足、地理的条件、その他の理由で、はたして持続出来るかどうかが危ぶまれていたものの、参加校も昨年より増し、無事第二回大会を終えることが出来た。北大が上位に喰込めなかったのは残念であった。今後、女子部員が、常に自主的に練習に参加することを期待したい。しかし、当部に於ける女子部員の不足と、女子に適した馬が居ないという点が今後の問題として残るであろう。参考迄につけ加えると、障碍程度は最高百十センチ、幅は九十センチで、至路等、女子の大会としては、他に比して程度が高いそうである。

○八月十一日

東北北海道大会（於北大）

この大会は、東北北海道地区の一般の大会で、今年の主催地が北海道になっている関係で、北大の馬を提供して行われた。従って、北大からは団体としては出場しなかったが、部員の関係分を述べると、本橋が北海道Bチームに参加して、同チームの優勝。婦人の部では片山、佐藤が北海道Aチームとして参加し、二位。又、婦人オープン戦で佐藤が優勝した。

○八月三十日

対北大乗馬同好会秋季定期戦（於北大）

対札幌鉄道管理局秋季定期戦（〃）

北大（−107.75）――（−318.75）

北大（−34.25）――（−96.50）

出場選手

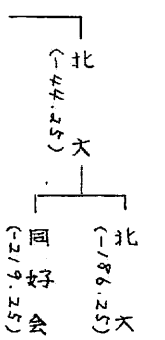
同好会　半沢、斉藤、乾、田中、松尾

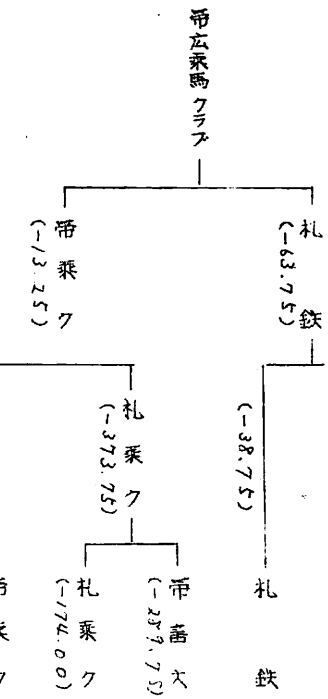
北　大　大場、吉田、原、河原、湯浅

この試合は、四年目が第一線から引退しての始めての試合であった。従って出場選手は三年目であるが、同好会に珍らしくも勝てたのは、新メンバーに対する親心でもあろうか。しかし悪い気はしない。

○九月十三日

北海道団体選手权（於帯広大）





出場選手　大場、原、河原、湯浅、吉田

トーナメントの抽籤の結果、はからずも、札幌勢同志がブロックに集まり、しかも最初の相手が同好会だったのでやりづらかった。幸い相手に経路違反があり、第一戦には勝てたが、どうも良い気持はしない。第二戦の相手である札鉄には毎回勝っているので気をゆるしたのがいけなかった。油断大敵!!　これは落下とタイムで勝敗が決ったのであるが、このことは今後とも注意すべき点であろう。優勝旗は帝広乗馬クラブなる正代の帝畜大の主将からなる新顔チームにさらわれたが、今回、高校生のみで編成された札幌乗馬クラブが、ライバル帝畜大を敗ったのは痛快だった。

○十月十八日

第五回関東東北女子学生馬術大会（於福島）

①学習院大A　②東大　③学習院大B　④福島大

個人戦　①木田（高山）②[illegible]（東大）③佐藤（北大）④深水（学習院）

参加校　青山学院大、東大、学習院大、東北大、福島大

昨年一・二位を占めた大会だけに、女子部員も大いに期待していた大会だったと思うが、女子部員の都合により、チームが編成出来ず、結局、佐藤一人が個人戦に参加し、三位となった。

○十月二十六・二十七・二十八日

第十四回国民体育大会馬術の部（於馬事公苑）

総合馬術

森本（北斗号）、田中（北倫号）

自馬中障碍飛越

田中（北斗号）、大場（北倫号、北嶺号）

自馬六段飛越

一位　森本（北嶺号）

佐伯（北標号）

自馬大障碍飛越
四位　伍伯（北標号）
一般賞与馬中障碍飛越
三位　北海道チーム〔千葉（北大）、山場（帝畜大）
　　渡辺（会社員）〕

○十月三十一日・十一月一日
第十二回全日本馬術大会（於馬事公苑）
綜合馬術
　田中（北榆号）、本橋（北斗号）
自馬六段障碍飛越
五位　森本（北嶺号）
六位　原（北標号）
自馬中障碍飛越
　本橋（北斗号）、大場（北嶺号）、斉藤(OB)（北榆号）

○十一月三、四日
第二回全日本学生自馬送手权大会（於馬事公苑）
一位　京大
出場送手　森本（北斗号）・田中（北榆号）、伍伯（北標号）、大場（北嶺号）

今年の国体は、東京馬事公苑にて行われたが、北大からは帝畜大の三頭、札幌乗馬クラブの二頭と共に、北榆号、北斗号、北標号、北嶺号の四頭を参加させ、北海道代表として出場した。出場種目及び成績は前記の通りである。国体の六段で、森本送手が老令十七才の北嶺号を駆って、百七十センチを完飛し、見事優勝したのは他の種目が余り振るわなかっただけに、その感激は大きかった。大障碍の北標号はかなり上位に進出すると思われたが、馬転し四位に止まったのは残念だった。全日本学生自馬は完敗だった。結果的にいえることは、このような自馬大会に勝つためには、昨年試みられた責任自馬制度の採用以外にはないだろう。しかし、これを実施することは、当部の性格から変えて行かねばならず、その他の条件を考えると、これは今後に課せられた一つの問題であると思う。

○十一月二十二日
対帝広畜産大学秋季定期戦（於帝畜大）
（シニアー）
帝畜大（-17.00）――北　大（-16.25）
（ジュニアー）
帝畜大（-60.75）――北　大（-167.25）

（オープン）

北　大（一26.50）――――（一36.25）

出場選手　森本、佐伯、田中、大場、吉田、原、河原、湯浅、千葉、鶴見、小山、玉沢、広岡、森、市川、恩田、堀川

国体その他の関係で、時期的に恵まれず、この定期戦は十一月の末になってしまったが、そのため、馬場は十数センチの積雪で、馬も蹄鉄をはずして使うという状態だった。それで障碍程度も割合低くしてあったのでシニアー戦では、使用馬六頭中五頭が両チーム共無減点で、残りの一頭で勝負が決るという非常に珍らしいケースとなった。新メンバーでの初の対抗試合であるだけに、是非とも勝ちたかったのであるが、かゝるケースでは無念の一語につきる。この日のオープン戦は、かってのレギュラーである四年目と、将来をになう一年目との混成チームにより行ったものであるが、一年目が大いに活躍し、勝つことが出来た。今後が期待される。

以上が三十四年度の試合結果であるが、総決算ともいうべき全日本学生馬術王座決定戦と全日本学生馬術選手权（個人戦、北大から二名参加）が十二月中旬東京馬事公苑にて行われる事になっている。この部報が発行される頃には既にその結果も分っている事であろうが、是非昨年の雪辱を遂げたいものである。

北大馬術部歴代部員住所録

小山　毅

永井一矢	第一代部長	札幌市南二条西一二丁目　㊗2435
高松正信	第二代部長	東京都世田ヶ谷区松原町　四一二九四
		北大名誉教授
		〃

氏名	年齢	学部学科	現住所	転業		
中野反二郎	四	農農	新潟県高田市南城町一ノ三三	県立長岡農業高校	黒沢亮助	第三代部長
平山弟介	〃	工機	舞鶴市余部下九四七ノ二寿山住宅	飯野産業KK舞鶴造船所	太桑康光	現部長
間宛市	五	農畜	浦河郡浦河町西舎宮舎	農林省日高種畜牧場長		
中谷勝紀	〃	工機	東京都杉並区清水町二一六	飯野重工業KK		
愛甲慶昇家	六	農実			札幌市北一条西二二丁目 ③1057	〃
岩垣映夫	〃	農農	福島県信夫郡平野村	福島県園芸試験場長	〃 南一条西二一丁目 ③0781	北大理学部教授
河崎秋三（旧姓三谷）	〃	農畜	東京都八王子市高倉町一ノ五五三	東京都競馬組合		
松本久磨	〃	農畜	札幌郡手稲町稲岡一九五	北大農学部教授		
加藤英夫	七	医	空知郡富良野町東四条南四丁目	開業		
永松四ノ郎	〃	農畜	東京都世田ヶ谷区松原町三ノ八〇二	商連製紙KK		
鍋井金太郎	〃	農化	任ブラジル	実業		
武田朝男	八	農畜	盛岡市呉服町二九ノ一	岩手県農業経済連畜産局		
田畑武夫	〃	医	札幌市南五条西二丁目	田畑産婦人科病院		
半沢直郎	〃	理化	〃 北六条西一二丁目②22 86	北大農学部教授		
東園基文（旧姓伊藤家文）	九	農農	東京都渋谷区八幡通二ノ二二	宮内庁		
植村勘一	一〇	農畜	浦和市本太町二ノ一六八			
久葉昇	〃	〃	兵庫県多紀郡篠山町郡家八七五ノ一	兵庫農大助教授		
本田恒康	〃	工	東京都千代田区紀尾井町四ノ一一			

大迫明徳	一一	理化	東京都世田谷区世田谷三ノ二五六〇	ケミ、ダイズ、リミテッド技術部
吉見一郎	〃	農芸	〃 杉並区神戸町 一一四	雪印乳業KK獣務部長
高杉直幹	〃	理化	札幌市北七条西一三丁目④37720	北大理学部教授
脇田代子郎	〃	農化	名古屋市千種区清住町二ノ三五	モンサント化成四日市工場
滋賀秀明	一二	医	東京都港区芝白金三光町三六四	大同製鋼診療所長
渋谷岡平	〃	農蚕	〃 渋谷区代々木一ノ二二	
前野正久	〃	農蚕	〃 目黒区中目黒一ノ九二一	森永乳業研究所長
森山武雄	〃	医	青森県南津軽郡女鹿沢村	国立岩木療養所長
石井昌長	一三	農化	茨城県石岡市元真地二七三	東京通商産業局石岡アルコール工場長
小笠原義顕	〃	工電	川崎市宿河原二二二三	日本電気KK玉川製造所技術部次長兼課長
小村達矢	〃	農生	岡山県津島岡山大学理学部内	岡山大学理学部教授
桶本勝登	〃	農蚕	東京都新宿区西大久保四ノ一七〇公衆酒舗	人事院東京地方事務所長
高井久芳	〃	農蚕	中川郡本別町仙美里	北海道仙美里農業
前川磯彌	〃	理化	室蘭市茶津町社宅番外七ノ号	日本製鋼室蘭製作所
松平悌	〃	農農	東京都渋谷区鶯丘町五六	日本麦酒目黒工場
山下正亮	〃	農蚕	札幌郡広島村字共栄	広島村長業共清組合家畜診療所主任
辻内武夫	一四	農蚕	東京都板橋区上板橋三ノ六三四七	中央競馬会総務部長
小田昇	〃	農蚕	静岡県熱海市伊豆山一八二香澄内	実業
木谷清喜貞	一五	農実	金沢市古寺町一二	瓦工建自営
中尾敦司	〃	工鉱	東京都千代田区丸ノ内大日本鉱業	同 工
西村雅吉	〃	理化	札幌市南二一条西一一丁目④64332	北大理学部助教授
秋吾照忠	一六	農林	東京都杉並区馬橋二ノ二二五	日本合板検査会
石井和彦	〃	農畜	鳥取市湯所い住宅一一号	鳥取大学農学部助教授

伊岡悦郎	〃	工鉱	函館市宮前町 二一三	函館水産高校
河原清作	〃	工工	小樽市忍路郡塩谷村	
荒沢洸	〃	農実	河東郡士幌町中士幌同下内	北東農産化学工業KK
関義人	〃	医	秋田県雄勝郡三梨村宮田同下内	三梨診療所
高木史朗	〃	工鉱	茨城県東茨城郡	川根中学校
中曽根賢	〃	農実	札幌市菊水上町 四六	道庁農務部畜産課
羊沢宏	〃	工機	〃 北六条西一二丁目 ㊁2286	北大工学部助教授
福光幸彦	〃	医	〃 南七条西四丁目 ㊂1843	福光小児科
岡田光夫	一七	工工	〃 南七条西二三丁目	市役所建設部土木課長
鈴崎愛男	〃	農実	横浜市南区永田町三七五	農林省神奈川食糧事務所
白取善三	〃	〃	青森県南津軽郡石川町乗師室	りんご問屋
山根己彦	〃	農畜	鳥取市立川町二丁目県営アパート一号	鳥取大学農学部助教授
大戸進	一八	農林	空知郡砂川町北本町三井木材社宅	三井木材砂川工場
平井宏	〃	工電	川崎市登戸一八六三	日本電気KK玉川製造所技術部無線課
稲葉恩一	一九	農化	大阪府高槻市南園町三三七	日本油脂KK佃工場
大手英夫	〃	理化	東京都新宿区西大久保二ノ二一九	富岡油脂化学工業平井工場
福岡邦康	〃	農畜	札幌市豊平五条十丁目道営アパート437	道総務部開発企画本部調査課計画係長
小林正英	二〇	農畜	東京都中野区鷺ノ宮一ノ二九三	郵経済局農林部農業改良係
洞島崇治	〃	工工	旭川市宮下通七	国鉄旭川鉄道管理局施設部工事課長
宇津見千之助	二一	農畜		
武田裕幸	二二	理地	札幌市南六条西二〇丁目㊂3286	北大理学部講師
宮崎利昭	〃	工機	東京都杉並区阿佐ヶ谷六ノ三二八	才一物産KK機械輸出部
和田靖	〃	農畜	帯広市西一条北一丁目	十勝支庁技師

田之上家久	二六	農水	函館市千代台町 一ノ一	北大水産学部助手
後藤義英	二八	獣医	札幌市円山西町 二〇九七	円山動物園飼育係長③1+26
斉藤善一	〃	農畜	〃 南五条西一五丁目	北大農学部助手
佐藤巌	〃	〃	〃 西一六条西八丁目	
下飯坂隆	〃	〃	神内郡神内町御園	北大日高実験牧場
鈴木敏夫	〃	〃	網走市美幌町東二条北一丁目孫方	美幌高校
渡植貞一郎	〃	〃	札幌市北二七条東二丁目	北大農学部助手
鷲野保	〃	〃	標津郡中標津町道農試根室支場内	道農業試験場根室支場
永井重翁	〃	農獣	岩手県久慈市中ノ橋	雪印乳業KK久慈工場
長井晴男	〃	農水	牧岡市四条町四条	大阪與市場KK
古谷昌司（住所不明）	〃	農畜	浦和市別所西野台一二一〇	古谷製薬東京工場
吉本正	〃	〃		宮城農業試験場
福島務	二九	医	空知郡栗沢町立病院内	北大病院産婦人科
阿部晃一郎	三〇	工鉱	紋別市潤之舞清明寮	住友金属鉱山鴻之舞鉱業所
鎌田正人（住所不明）	〃（三四）	獣畜	浦河郡浦河町西幌別	鎌田牧場
田中浩	〃	工法	札幌市菊水西町一〇	
正畜広之	〃	理動	〃 北八条西一八丁目	北大理学部大学院
石原和天	三一	獣	新冠郡新冠村農業共済組合内	同 上
大久保利彦	〃	〃	岩見沢市八条西二丁目工藤牽市方	雪印乳業KK
岡本光	〃	農生	東京都文京区雅司ヶ谷六一十条寮	十条製紙
加藤斉	〃	獣	神戸市兵庫区熊野町五丁目一九ノ五	神戸動物園
加藤昌太郎	〃	理物	横須賀市小原台同下内	防衛大学応用物理学教室
斉藤成俊	〃	農経	岩見沢市四条西五丁目及川方	

氏名	業	部科	現住所	帰省地	出身高
千田哲生	〃	獣	東京都世田谷区玉川用賀町三ノ一 競馬会厩舎	馬事公苑江生研究室	
三井康	〃	農植	札幌市北一五条東三丁目	北大農学部助手	
荒川満	三二	圣	〃 南八条西二丁目	札幌トヨタ自動車KK	
渡本幸八	〃	理植	千才市栄町三丁目	千才高校	
岡部満雄	〃	農畜	札幌市琴似町二四軒三三九中根方	道庁畜産課 ③1614	
青柳実	〃	圣	富山市不二越町六	不二越鋼材工業KK	
宮沢竜	〃	農林	横須賀市田浦町二ノ八四	農林省畜産局江生課	
伊藤亮	三三	獣	郡下武蔵野市関前一二三	北大理学部大学院	
乾直道	〃	理動	札幌市北一七条西六丁目宮脇方	通産省鉱山基準監督局	
栗原康	〃	工鉱	宇部市		
柴田久男	〃	工電			
樋口正明	〃	法	東京都世田谷区上馬町二ノ一三	品川区役所	
松田桜	〃	医業	札幌市北一四条西一四丁目	札幌医大助手	
渡辺後弘	〃	工化	東京都新宿区下落合一ノ四六〇目白北友寮	北海道炭砿汽船KK	
生田勝一	三四	圣	札幌市北一四条西一九丁目競馬協内	北海タイムス社	
宮原照雄	〃	文心	〃 北一八条西四丁目	中央競馬会中山競馬診療所	
千葉幹夫	〃	獣	船橋市方作町九二中山寮		
上井敦	〃	農畜	舞鶴市島崎六ノ五		
中村美幸	〃	圣	東京都中野区鷺ノ宮六ノ七八二		
村山哲	〃	圣	市外豊平町美園一区④3977		
栗津礎太郎	四	水産	函館市松陰町一二 啓徳寺寮	札幌市南一条西一七丁目④0301	札幌西
片山静子	〃	文英	札幌市北二条西二三丁目	同上	〃

佐伯雄二	〃	農畜	札幌市北五条西九丁目青年寄宿舎	桑
田中紀介	〃	農林産	〃 北一六条西八丁目榆影学寮	福岡県浦水市宮代町六
長谷川邦夫	〃	法	〃 北一八条西五丁目 ㊥1369	同 上
本橋幹久	〃	農畜	〃 青年寄宿舎	鳥取市上町二〇ノ一
森本栄次	〃	農林産	〃 〃	東京都葛飾区奥戸本町一三八四
大場善明	三	文夾	〃 北一七条西二丁目	同 上
河原紀夫	〃	理地	〃 北七条西一二丁目木沢寮	大阪市阿部野区松崎町二ノ七五
佐藤典子	〃	医	〃 北七条西一三丁目	同 上
瀬田信哉	〃	農畜	〃 北九条西一九丁目琴野方	大阪市栗住吉区平野三十歩町
高階嬉子	〃	医	〃 南一四条西二丁目小林方	鎌倉市十二所三三
東一郎	〃	獣	〃 榆影学寮	神戸市長田区房王寺町三ノ八
湯浅正之	〃	農畜	〃 北一三条西二丁目能登谷方	高崎市新保田中町五三〇
吉田亨	〃	工化	〃 北一七条西二丁目柳田方 ㊥6289	東京都中野区鷺ノ宮一ノ二〇一
佐藤通夫	〃	医	〃 北一二条西二丁目汐手寮	岡山県西大寺本町一二四二
小山毅	二	教育	〃 北二二条西二丁目酒井政雄方	東京都太田区田園調布一ノ一三二二
玉沢一瞬	〃	医乗	〃 南一六条西八丁目	同 上
千葉哲記	〃	農畜	〃 北一七条西二丁目獅田方	空知郡上砂川町朝陽台二ノ二八
鶴見好博	〃	理化	〃 北一七条西三丁目若田方	静岡市太田町四三
中村寿孝	〃	水産	函館市松陰町一二番恵寮	室蘭市幌萌町三一
広岡暢夫	〃	農畜	札幌市北六条西一二丁目稲垣方 ㊥6598	授産川市春里淀見ヶ丘九六四
森弘準	〃	工橋	〃 北一七条西三丁目若田方	愛知県碧海郡高浜町高浜授留六六
森田系生	〃	工土	〃 北一三条西一四丁目 ㊥1264	同 上
四柳哲久	〃	医乗	〃 南一八条西一二丁目 広崎方	神戸市須磨区須磨浦通四ノ八九
猫塩修一	三	理化	〃 北二二条西二丁目協和荘	広島県大竹市大竹町小島新開

大森	酒水東	札幌北	鳥取東
抽協	札幌北	札幌西	藤学園
天王子	酒泉学苑	共産	前橋
大泉	六	新宿	札幌南
砂川北	静岡	室蘭栄	大手前
刈谷	札幌西	長田	修道

伊藤公一	二	医師	〃	南二五条西一二丁目	同上
市川瑞彦	一	理学士	〃	北一七条西八丁目 ㊙3443 恵迪寮	上川郡美瑛町緑町南三号
市村輝宜	〃	〃	〃	北一四条西一丁目 平瀬方	大阪市東区南新町二ノ一六
岡田征至	〃	文	〃	南七条西一七丁目	根室市松本町四ノ一
恩田正臣	〃	理	〃	北一六条西五丁目 北陽舘	郡馬県山田郡毛里田町矢田瓜
国田晴彦	〃	医	〃	琴似町宮ノ森一二四七	同上
小出勇達	〃	医	〃	南四条西八丁目 興山方	大阪市阿部野区美章園一ノ八八
吳吾峯郎	〃	理	〃	北八条 五丁目 本多方 ㊙3443	東京都渋谷区長谷戸町四六
清水洋	〃	理	〃	汝羊寮	大阪府泉南郡岬町淡輪八六五
志水一允	〃	理	〃	北二九条西八丁目 福井方	東京都江東区深川三好町二ノ一六
田中セツ子	〃	理	〃	北八条西一丁目 北楡荘	〃 目黒区柿ノ木坂八二四
第木謹太郎	〃	理	〃	恵迪寮	静岡市横田町二ノ一五
橋信	〃	理	〃	恵迪寮	東京都小金井市貫井八五四
長藤友連	〃	理	〃	北一四条東三丁目 山浦方	〃 目黒区柿ノ木坂三〇六
新原輝久	〃	理	〃	北六条西二〇丁目 西村方	〃 杉並区阿佐ケ谷六ノ二四
原重一	〃	理	〃	北一四西三丁目 喜多方	〃 文京区大塚坂下町九九
堀川芳男	〃	理	〃	恵迪寮	東京都中野区上高田一ノ九六
宮崎健	〃	文	〃	南一七条西九丁目 山本登方	大阪府南河内郡伏山町西池尻四三七
山崎一儒	〃	理	〃	恵迪寮	大阪市西成区西四池町一
山崎茂	〃	水	〃	北七条東三丁目下河原方 ㊙8762	タ張市福住一八番地三区
重岡眞里子	三	文英	〃	北一二条西四丁目 田中アパート	旭川市北門町九丁目
支倉隆子	二	文醫	〃	北楡荘	釧路市栄町八ノ二
浅野紀美恵	一	文類	〃	南一条東六丁目	同上
田中守	〃	理	〃	北七西一二仙台学寮（休部中）	横浜市金沢区六浦町一ノ二八七
扎幌南	旭川西	大手前	桜塚	太田	扎幌南
住吉	学習院	岸和田	西国	東学大附	麻布
国立	武蔵丘	武蔵丘	小石川	武蔵丘	住吉
住吉	タ張北	旭川北	滝川	扎幌北	金沢

編集後記

師走もおしつまって、北海道に寒い〳〵冬がやってまいりましたが、我々部員一同は、毎日、鼻の頭を真赤にして、しばれついた雪の上で寒風を切って練習にはげんでおります。我が北大馬術部は、多くの先輩諸兄姉の残された、微動だにしない礎の上に立って、少しずつではありますが、進歩発展してまいったのであります。

この部報も創刊以来、ようやく才五号となり、今回も皆様の温かな御助力によって、発行の運びとなりました。まことにつたない編集とはなりましたが、その中から、現在の馬術部の活動状況なり、部の雰囲気なりをわずかでも見出していただけるなら、それ以上の喜びは御座居ません。

なお、昭和三十五年度には、馬術部三十年誌を出そうと計画しておりますので、色々な「想い出話」や、当部に対する温かい御忠告なりありましたら、当部宛にお送り下されば、幸に存じます。

末筆ながら、部報発行に御協力下さった方々に、改めて感謝いたします。　（鶴見記）

札幌市北八条西五丁目　北大体育会内　北大馬術部